

## 日本ブランド発信事業

「ショートフィルム（短編映画）で日本の魅力を紹介～モロッコ～」

2016年3月

「日本ブランド発信事業」専門家

国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア  
フェスティバル・ディレクター 東野正剛

日本・モロッコ国交関係樹立60周年の節目に、北アフリカは、モロッコの首都ラバトにあるモロッコ日本国大使公邸、ラバトの中心街にあるアート劇場、そしてマラケッシュの映画学校にて私がフェスティバル・ディレクターを務める国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア（以降、「当映画祭」として表記）」のジャパン部門優秀作品や映画祭がプロデュース指揮をした特別製作作品など、日本の魅力が満載の4作品を上映しました。それぞれの作品上映後はその作品の内容について、日本の文化的要素など解説しました。

当映画祭の代表を務める俳優の別所哲也と私が「日本ブランド発信事業」で、ショートフィルムを上映しながら、世界各地にて日本文化に興味を持っていただく活動も行っているのは今年で4年目となります。昨年は、サウジアラビア、オマーン、マレーシアに参り、過去にもイランやエジプトなど、イスラム国を中心にこの事業に参加させて頂いた経緯があります。

2月29日（月）の夜にモロッコに到着。私にとって初めてのアフリカ大陸への渡航となります。「アフリカ」と聞くと暑いイメージがありますが、北アフリカに位置し、対岸にはスペインなど地中海を挟んでいるため、朝夕は肌寒いくらいでした。翌日、3月1日（火）に第一回目の上映&講演をラバトにある日本国大使公邸にて行いました。火曜日の午後でしたが、事前に大使館からのメーリングリストでお声かけをしていたモロッコの映画業界（映画祭、監督、プロデューサー、俳優）やテレビ業界の方々など大勢の方々に来場頂きました。作品上映前には黒川恒男特命全権大使よりご挨拶を頂き、日本とモロッコ両国の映像文化交流の新たなスタートを感じました。



黒川恒男特命全権大使と



上映会ゲストのお迎え

上映ラインアップは、日本食文化を全世界に啓蒙する目的として当映画祭が制作し、昨年のミラノ博の日本館にて上映された「しゃぶしゃぶスピリット (Yuki Saito 監督)」、昨年の当映画祭のジャパン部門入選作品、「小春日和 (齋藤俊道監督)」、2014年カンヌ映画祭学生部門 (シネフオンダション部門) にて2位を獲得した「Oh Lucy! (平柳敦子監督)」そして昨年の当映画祭にてジャパン部門優秀賞を獲得した「こころ、おどる (岸本司監督)」の4作品でした。



設置されたスクリーンで作品上映



上映会の様子

上映前に私から現代における「ショートフィルム（短編映画）」や短編動画コンテンツについて、日本でもますますスマートフォンやパソコン上で視聴する「短い映像」の需要化が進んでいることについて話しました。従来、ショートフィルムは若手映像作家が長編映画の監督を目指す第一ステップとして制作されるパターンが定着していましたが、現在においては必ずしもそうでなく、YouTube 上で気軽に見られるような短い動画コンテンツ制作、また、企業がメッセージ性とエンターテインメント性を融合させたブランド・ショートフィルム制作など、作家性と広告要素が合体するコンテンツ作りで若手映像作家の活躍の場が広がっていることについても言及しました。各作品の上映後は、日本の「鍋」文化について、また「お通夜」などの儀式的なことについて解説しました。上映終了後、同大使公邸でお越し頂いたゲストの為にレセプションが開かれ、私もメディアのインタビューや現地の映画人・関係者と交流ができました。



講演の様子



レセプションでの交流



翌日、3月2日（水）、ラバトで主催されている「モロッコ短編映画祭 in ラバト」の代表である Saad Bennani 氏と面会。お互いの映画祭の紹介と、この出会いをきっかけに日本とモロッコの映像文化交流について有意義な話ことができました。また、ラバトに今年から開校したばかりの映画学校を訪れ、構内を案内いただきました。構内には、今回の事業に関するポスターが掲示されており、大使館の方々の広報努力に感心いたしました。そして午後、首都ラバトの旧市街にある La 7e Art 劇場でも上映を行いました。各作品の上映ごとに拍手が起こり、コメディ作品では観客から笑い声も聞こえて、純粋にショートフィルムを楽しんでもらえたようでした。日本の文化要素はあるといえ、分かり易いストーリーとコメディ要素は今まで上映と講演を行ってきたイスラム諸国でも好評のようです。また、地元のテレビ、新聞メディアにもイベント告知や取材を頂き、日本の映像文化に対する関心が非常に高いことが証明されました。



上映前で賑わう劇場



上映前の様子



劇場前に掲げられたイベント告知バナー



劇場前に設置されているイベントのポスター



現地のメディアから質問を受ける



3月3日（木）は、ラバトからマラケッシュまで車で移動。途中、日本のパーキングエリアのような場所でカフェ休息も含め3時間ほどで到着しました。午後には、マラケッシュ高等映像芸術学校を訪れ、学長の Vincent Melilli 氏自ら、構内を案内いただきました。丁度、春休みということで学生はあまりいませんでしたが、残っている生徒の為にワークショップなど行われており、映画制作のリハーサル現場なども視察できました。



マラケッシュ高等映像芸術学校の生徒によるワークショップ風景



Melilli 学長と歓談

夕方、この学校の構内の劇場で日本のショートフィルムを上映しました。上映前、私から当映画祭の歴史や目的などを説明させて頂き、上映後には学長の Melilli 氏がモデレーターとなり、質疑応答のセッションとなりました。観客からは「しゃぶしゃぶスピリット」に関して、「モロッコでも男性が女性の父親から結婚の許しを得る習慣もある。この映画にとっても共感した」とか「ここ、おどる」については、「日本語はわからないが、沖縄弁など各地独特のなまりが感じとれる」と鋭いコメントも頂きました。また、Melilli 氏からは、「生徒に映画を勉強させる時は必ず、黒澤、溝口、小津を見せるが、今の日本の映画業界はどうなっているのか、国内でのショートフィルムの位置づけはどうなっているか」などについても質問を受けました。観客の中からも日本のアニメについての質問もあり、「日本=アニメ、漫画」というイメージはやはりモロッコでも強いと感じました。



上映前には日本に関する資料などを配布



Melilli 学長とのトークセッション

モロッコから帰国の途の際、経路がパリであったため、3月5日（土）、パリでショートフィルムに関する2名のフランス映像関係者とミーティングを行いました。一人は、「シネマテーク・フランセーズ」で短編映画の企画も担当されている Bernard Payen 氏。この私立文化施設はフランス政府が大部分出資し、映画遺産の保存、修復そして配給を目的とし、4万本以上の映画作品と映画に関する資料、物品を所有する場所です。週末土曜日の朝にも関わらずお時間を頂き、「シネマテーク」で近い将来、日本のショートフィルム上映の特集などを行うことができるか相談させて頂きました。Payen 氏も「小津、溝口、黒澤などの日本映画特集は多いが、日本の短編映画はほとんど無い。それはいいアイデアだ」と、話されました。毎年、フランスのクレルモンフェラン国際短編映画祭が行われる2月上旬などにあわせて、そうした企画を来年実現したい、とも提案頂き、今後は「シネマテーク」とのコラボレーション実現にむけて準備したいと考えます。その後、フランスで活躍する映画監督・脚本家の Nicolas Saada 氏に、彼が住まうマレー地区のカフェでお会いしました。Saada 監督は、フランスを代表する映画批評誌「カイエ・デュ・シネマ」の元編集員で、その後、脚本家・映画監督に転向されました。特にスパイ映画やスリラー作品に定評のある脚本家・監督としても知られています。ご本人の脚本・監督作で2008年にインドで起こったムンバイ同時多発テロを題材にしたスリラー「タージ・マハル」が昨年末にフランスで公開され話題になりました。Saada 監督は日本映画にも精通されており、2016年中にも来日の予定があるそうで、日本でショートフィルムを撮影したい、と話されました。今年、ご本人の来日の際には、再会する約束をしたのと近い将来、Saada 監督に日本を撮って頂く際には私も協力したいと思っています。



シネマテーク・フランセーズの Bernard Payen 氏と





Nicolas Saada 監督と

短い滞在ではありましたが、当映画祭もなかなか出会う機会が無かったモロッコや北アフリカの映画関係者とのネットワークが広がり、来年以降、モロッコを始めとする北アフリカからのショートフィルム公募数が増える成果を生み出したいと思います。そして今回の事業をきっかけに益々、北アフリカ映像業界と当映画祭の文化交流を行い、「日本ブランド」への理解を更に高めていきたいと思っています。最後になりましたが、日本外務省と現地日本大使館の皆様のご協力に心から感謝いたします。

【参考リンク】

[外務省「日本ブランド発信事業」ウェブサイト](#)

[ショートショートフィルムフェスティバル&アジア ウェブサイト](#)